

平成 29 年 5 月 23 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380636

研究課題名(和文)25年後の戦友会のフィールドワーク：戦争体験の等身大の意味づけに関する実証的研究

研究課題名(英文)A fieldwork of veterans groups after 25 years

研究代表者

溝部 明男 (Mizobe, Akio)

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：90127142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：大村英昭は「煽る文化」と「鎮める文化」という図式を提唱した。ある戦友会の参与観察と大村の図式に基づいて、戦友会とは、旧軍の将兵意識を鎮めるための一つの装置であると特徴づけた。戦友会のメンバーは、(1)過去の軍隊風振舞いの再現、(2)戦争体験の物語り、(3)戦死者の慰霊を通じて、彼らの軍隊体験を見直す共同作業に従事していると考えられる。

軍隊体験の物語りの一つのタイプは、次のようなものである。出征を拒否することはできなかった。国を守るために戦った。戦死者は戦争の犠牲者である。英霊ではない。彼らの物語りの根底には、太平洋戦争は国を守るための戦いであった、という見方が横たわっているように思われる。

研究成果の概要(英文)：Hideaki Ohmura presented the famous scheme of inflaming culture and calming culture. Based on Ohmura's scheme and our participant observation, veterans' groups (Sen'yukai) are characterized as a cultural device by which the consciousness of soldiers is calmed in the postwar days. Members of veterans' group are considered to be engaged in the group work to re-recognize their war experience from the present point of view, through (1) replaying of typical behavior of the army, (2) telling various stories of the war experience each other, and (3) attending the memorial ceremony of the war dead.

One type of their war experience stories is following: They could not escape military service. They went to war in order to defend their country. The war dead are not the fallen heroes, but victims on the battlefield. Their stories of the war experience are underlain by the view that the Pacific War was a self-defense war.

研究分野：社会学

キーワード：戦友会 煽るプロセス 鎮めのプロセス 戦争体験の再認識 過去の振舞いの再現 物語り 慰霊祭 犠牲

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦争(あるいは軍事)社会学という専門分野は、研究蓄積の少ない未開拓の領域が多く残る分野である。2015年日本社会学大会シンポジウム「戦争をめぐる社会学の可能性」が開かれ、この前後より「戦争社会学」という言葉がタイトルに入った書籍の刊行が続いている。本研究は、先行研究の少ないこのような分野に属する。

(2) 「戦友会」という集団がある。旧日本軍の将兵で、戦場を経験した人々が、戦後になって昔の仲間と再会するためにつくった集団である。日本全国に散在し、1970年代が戦友会活動のピークであったといわれている。それらの戦友会集団が、メンバーの高齢化のために戦後60年頃から次第に解散し消滅する傾向にある。研究代表者は、ある戦友会の参与観察を1979年、1981年、2005年に行った。長期にわたって、戦友会を継続して観察している先行研究は(本研究以外には)ない。

(3) 戦友会現象についての社会学的研究は、2冊の単行本がまとめられているが、参与観察に基づいた戦友会論はまだない。

2. 研究の目的

(1) 旧日本軍将兵の出征・軍隊・戦場体験を、長期的な時間の経過の中でとらえること。出征・戦場体験は、栄光と悲慘という正反対の側面を潜在的には内包していると考えられる。どの側面が表出されるかは、当事者の置かれた状況によって異なるだろう。長期的な時間の流れの中で、どの側面が表面化し、どの側面が退いてゆくのか、フィールドワークの資料に基づいてあとづけることを目的とする。

(2) 戦友会の本質は何か。戦友会の活動をひと言で表現するとすれば、どのように表現できるか。戦後の戦争経験のない世代にも理解できるように、簡潔な言葉で表現する必要がある。これまでの研究では、戦友会の三要素という概念が使われてきた(伊藤桂一による)。慰霊、体験の語り合い、親睦という三要素である。三要素を並列するのではなく、この三要素を包括するような概念化が必要である。これが研究の第二の目的である。

(3) 日本の戦後における戦友会現象は、アメリカやドイツには見られないといわれている。東アジアの他の国において、戦友会のような集団は存在するのだろうか、パイロット・サーベイトとして、中国の現状を調べる。

3. 研究の方法

(1) 本研究代表者は、「空母隼鷹戦友会」という戦友会の観察を長期にわたって継続してきた。この戦友会は、戦後約30年後になって、かつて「空母隼鷹」という艦船に乗艦経験のある人々がつくれた。「空母隼鷹」は敗戦時に無傷のまま残った数少ない艦船のうちの一隻である。戦死者は比較的少ない。この戦友会の参与観察の記録を詳細に検討することで、上記二つの研究目的を達成する。

(2) 上記戦友会の参与観察の記録は、1979年、81年、2005年のものが作成されている。前二つの記録はすでに公開されている。05年の記録は手書きのまま残されているので、これを入力し、場面ごとに細かく区分けして、79年、81年の参与観察記録と比較分析する。また、参与観察の際に撮影した写真が残されているので、これをデジタル化し、写真を比較することによって、戦友会の継続的な変化を分析する。

(3) 戦友会を分析し説明するために、基礎理論として、大村英昭の「煽る文化と鎮めの文化」論、L.フェスティンガーの「認知的不協和の理論」などを応用する。わかりやすい説明を工夫する。

(4) 一般に、戦争中には、自軍の将兵に対して、戦後にしかるべき報酬と名誉ある地位が約束されていただろう。しかし、戦争が敗戦で終わった場合、その約束は反故にされてしまうだろう。中国は国共内戦を経験した。戦勝側と敗戦側が中国本土と台湾に分かれて事実上の国家をつくれた。それぞれの側で、共産党軍と国民党軍の旧将兵がどのような境遇にあるか、連携研究者の協力を得て、実地に調査する。

4. 研究成果

(1) 1981年会合と2005年会合を、フィールドノートにより比較する。変化していない点は次の通りである。

戦友会の年間の活動内容に変化はない。戦友会会合開催、呉旧海軍墓地の慰霊祭参加、会報の発行など。

年一回開催される戦友会会合のプログラムはほぼ同一である。集合、慰霊祭、総会、宴会、朝食、散会。

変化した点は、以下の通りである。

慰霊碑2基を呉旧海軍墓地に建立し、その維持管理にあっている。

戦友会会合に集まる人数は大幅に減少している。2005年の出席者数は、1981年の1/4程度に減少した。メンバーの高齢化による。

夫人たちの参加が相対的に増加した。

夫人の出席割合は、1981年には4.8%であったが、2005年には14.3%に増加した。参加する男性に同伴してくる夫人、物故した夫の未亡人、戦死した夫の未亡人(遺族)の参加が見られた。慰霊碑があることは、遺族にとっては心の支えになっているようだ。夫人たちには軍隊・戦場体験そのものはないが、夫の出征・戦場体験が共有された経験になっているようだ。

会合の雰囲気、緊張感あるものから、肩の力の抜けたものへと変わった。出征・戦場体験の持つ意味が、いくらか変化したのではないかと。

(2)出席者たちの語る話題、語る心境の変化。

ある夫人によると、この会合ではあまり戦争の話がでない。出る話は、どこそこが痛いとか、病気の話が多いという。

「あの世に行っても一緒にやろうや」と戦友に語りかける人がいた。「あの世意識」が表現されるようになった。

「生きていられて幸せ」。これは夫婦で出席していたカップルの夫人から出た言葉である。夫人は夫の気持ちを代弁したかのような印象を受けた。そばにいた夫や他の出席者たちも無言でうなずいていた。男性の出征・戦場体験が夫婦の共有経験になっており、夫自身は口にしにくい言葉を夫人が表現したと思われる。

ある少年兵がリンゴ一個を盗み、追われてマストに登り、墜落死した話を聞いた。

航海中に機関に落ちて戦死した人の遺体を、帰港してのちに回収した話が出た。複数の人がその話題に参加して惨い情景が語られた。

上記5つの語り、話題は、2005年に初めて聞く話であり、1981年には聞いたことがなかった。戦後60年経過すると、出征・戦場体験の語られ方が変化することがわかる。月日の経過の重みを実感される。

(3)1979年、1981年、2005年に撮影した約200枚の写真をデジタル化した。うち60枚を報告書に収録した。81年と05年の写真を比較する。軍艦旗の掲揚は81年にはなされたが、05年には軍艦旗は持参されていたが、掲揚されなかった。また、両年とも参加者一同が集合して記念撮影がなされた。81年には参加者の列の中央に軍艦旗が広げられたが、05年には旗は畳まれたままで広げられなかった。また、宴会時には、中央正面の壁に軍艦旗・戦友会旗と並んで、往年の「空母隼鷹」の写真が掲げられていた(81年)。しかし、05年には、その写真は貼られていなかった。05年には、「過去への遡及」「過去再現の志向性」の忠実さの程度が低下していた。

(4)出征・戦場体験から時間が経過するにつれ、体験から距離を置いて、より冷静に体

験の意味を考えることができるようになる。このことを、彼らの将兵意識と出征・戦場体験が鎮まったと表現したい。時間の経過とともに、彼らは「鎮めのプロセス」をたどる作業を行っていた、と考えたい。本研究が提出する主要な仮説である。戦友会は、メンバーが共同でこの「鎮めのプロセス」をたどる場を提供する集団であったのではないかと。これが本研究の結論的な部分である。戦死者の慰霊祭に出席すれば、敗戦時から長い時間がたって、自分たちは生き残ったこと、戦後の生活の中でいろいろなことがあったことを実感するであろう。また、軍帽をかぶって敬礼をしたり、軍艦旗を掲揚するなどの「過去に遡及する」振る舞いを演じることで、ひるがえって、戦時からの時間の経過を実感するであろう。そうする中で、彼らの出征・戦場体験は確かに経験されたことであるが、それはかなり隔たった過去のことであり、済んだことであるのは疑いのないことである、と感得されるのではないだろうか。こうして、出征・戦場体験が彼らの人生の中に占める相対的な重要性が低下する。これが、体験から距離を置いて、体験に冷静に向き合うということであると考えられる。

(5)時間が経過すればそれに伴って、体験が鎮められるというわけではない。時間の経過とともに、多様な出来事の重層的な蓄積が実感されてはじめて、人生の中で戦争体験がもつ相対的な重みの変化が知覚される。そのような知覚へとつながる契機が必要であろう。

知覚の変化を促す契機となる営みを、「鎮めの技法」と呼ぶ。「鎮めの技法」は二種類ある。一つは、旧軍隊で通用していた「過去の振る舞いを再現する」行為であり、他の一つは、体験を物語ることである。これらの二つの技法により、彼らは過去の体験とまざまざと向き合うこととなり、彼らの体験を考え直すことになっただろう。(論理的にはここで旧将兵意識を高揚させて、戦時日本へと復古する方向もありえたが、戦後日本の戦友会はその方向をとらなかった。戦後日本は社会全体として、戦時日本への行き過ぎた国防意識を鎮める方向に進んでいた。戦友会の人々もある側面では、この社会全体の鎮めの方向に同期していたと考えられる。)こうして、彼らの出征・戦場体験は彼らの意識の中で、距離をもって向き合うことができるようになり、体験への彼ら独自のこだわりが幾分か解きほぐされていったのであろう。これを「鎮めのプロセス」と呼びたい。「鎮めのプロセス」は戦友会以外の場にも生成していたと推測されるが、共通の体験をもつメンバーと共に過去の体験と向き合う場としては、戦友会にはほかにない機会であったろう。

(6)戦友会の会長さんは、戦死者について次のように語った。戦死者は、英霊ではない、犠牲者である。(したがって、戦死者を戦友会独自のやり方で慰霊しなければならない、ということだ。)ヤスクニに戦友会としてはまとめて二度ほど参拝している。しかし、ヤスクニの戦死者儀礼に戦友会として賛同しない、という見解であろうと思われる。この戦友会が、2基の慰霊碑を建立したことの背景には、このように、ヤスクニとは一線を画すという思想がある。

(7)メンバーが戦友会に来るきっかけの一つは、出征・戦場体験を周囲の人々とストレートに話題にすることができないという異和感であったろう。敗戦後には、完全な非武装化が進行し、戦争否定論が社会の主流となった。しかし、戦前期・戦時期日本においては、出征・戦場体験は公式的には栄光に包まれた輝かしい体験であった。体験者たちは、出征行為・戦闘行為へとコミットしてしまっただけでなく、戦時期日本の公式見解を否定して、戦後日本の戦争否定平和主義に容易に組することができなかつた。このような異和感を抱えながら、出征・戦場体験を忌憚なく語り合える戦友会へと集まってきたのであろうと考えられる。旧将兵としての意識と体験、および戦後日本社会への異和感を(完全に払拭することはできないとしても)小さくすることに、上述の「鎮めのプロセス」が重要な役割を果たしたと考えられる。

(8)上述の「異和感」を理解するために、L. フェスティンガーの「認知的不協和の理論」を応用した説明が参考になる。出征・戦場体験者は、たとえ半ば強制されて出征したのであっても、ひとたび出征し、戦闘行為にコミットしてしまうと、その後その体験を否定することはむずかしくなる。敗戦後に戦争否定論が社会の主流になっても、体験者たちは、自分たちの体験についての戦時期の公式の見解を捨てることができないので、周囲の人々の見解との間の「認知的不協和」を経験せざるを得ない。この不協和を低減するために、同様の経験を持つかつての戦友が集まる戦友会へと向かうことになったのであろう。

(9)戦友会の会長さんが、「国はまもらなければ…」と語ったことがある(2005年)。これを敷衍すれば、アジア・太平洋戦争では彼らは国を守るために戦った、ということになろう。しかし、自衛のための戦いは一般にありうることに認めるとしても、アジア・太平洋戦争が自衛の戦争だったと考える戦後世代の人間は少数であろう。この点で、戦友会の人々と戦後世代は、物語を共有できないであろう。戦友会の人々と戦後世代の間の異和感は払拭できないと思われ

る。むしろ、戦友会の人々は、かつての敵であったアメリカのヴェテラン達と物語を共有できる可能性がある。例えば、次のような可能性である。ともに、自分たちの国のために戦っていた、お互いよくたたかったものだ、かつては敵同士にわかれて憎しみがあつたが、いまとなっては、敵味方、勝ち負けにこだわるつもりはない、今となっては、ノーサイドの精神で交流しよう、というふうに。

(10)連携研究者による、中国における旧兵士の境遇の現状についての調査結果は以下の通りである。中国本土においては、公式的に認められている組織以外のインフォーマルな集団が活動することはできない。したがって、旧国民党軍の兵士たちの集団が存在することはありえない。旧国民党軍の兵士で中国本土に残留した人々の消息は、表面化していない。共産党軍の兵士は、烈士として顕彰されている。たとえば、山西省太原では、太原双頭革命烈士陵園の中に戦役烈士紀念館がある。台湾においては、旧国民党軍の兵士たちは、眷村というところにまとめて住んでいる。眷村は台湾各地に設けられている。彼らは台湾の国民党のために戦ったとみなされて、一定の待遇を受けている。かつて日本軍の将兵として戦った人々の処遇はいまだ定まっていない。台籍日本兵などの資料を展示する資料室が、高雄の戦争輿和平紀念公園の中に造られている。

(11)今後の研究の展開については、次の通りである。今回研究の対象としたタイプ以外の戦友会について、調査すること。「隼鷹戦友会」で見られた戦友会活動の様式について、他の戦友会でも同様のスタイルが見られるのかどうか。そのスタイルはいつごろどこで始まったのか。起源の問題。「隼鷹戦友会」のメンバーにインタビューすること。本研究の仮説についてどういう感想を持つか。また、(戦時期の戦意を高揚させるための)「煽るプロセス」と、(戦後に戦時動員体制を解除して平時に戻すための)「鎮めのプロセス」論を適用できるような研究対象を求めらる。

<引用文献>

- フェスティンガー、L.、認知的不協和の理論、誠信書房、1965、277。
大村英昭、鎮めの文化、日本放送出版協会、1995、133。
高橋三郎編、共同研究 戦友会、田畑書店、1983、342。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

溝部明男、出征体験・その意味づけ・戦死者の慰霊：ある戦友会の参与観察から、北陸宗教文化学会大21回学術大会、2014年10月18日、金沢大学(石川県・金沢市)

溝部明男、25年後の「空母隼鷹戦友会」会合：1981年と2005年の比較、関西社会学会第65回大会、2014年5月24日、富山大学(富山県・富山市)

〔その他〕

溝部明男、鎮めの装置としての戦友会(科学研究費成果報告書)、金沢大学人間社会研究域、2017、75.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

溝部 明男 (MIZOBE, Akio)

金沢大学・人間社会研究域・客員研

究員

研究者番号：90127142

(2) 研究協力者

銭 閑適 (SEN, Kanteki)

劉 晴暄 (RYUU, Seisen)

張 泓明 (CHOU, Oumei)

ガザンジエ (GAZANGJIE)